

百人一首を書きましよう。

名にし負はば逢坂山のさねかづら

人に知られて来るよしもがな

三条右大臣

小倉山峰の紅葉葉心あらば

いまひとたびのみゆき待たなむ

貞信公

みかの原わきて流るるいづみ川

いつ見きとてか恋しかるらむ

中納言兼輔

山里は冬ぞ寂しさまさりける

人目も草もかれぬと思へば

源宗于朝臣

【現代語訳】

逢坂山おうさかやまのさねかずらが、逢って寝るといふ名を持っているならば、それは手繰たくれば来るように、人に知られないで貴方と遭う方法があれば良いのに。

【現代語訳】

小倉山の峰のもみぢ葉よ、お前に心があるのなら、もう一度行幸みゆきがあるからそれまで散らずに待っていて欲しい。

【現代語訳】

みかの原を分けて湧き出てくる泉川の「いつみ」ではないが、いったいいつ見たというので、このように貴方が恋しいのだろうか。

【現代語訳】

山里は、冬の寂しさがまさって感じられる。人も来なくなり、草も枯れてしまうことを思うと。